《Waw-Conversive現象》理解のための作業仮説[1]
――― 談話文法の視点から ―――

池　田　　潤

古典ヘブル語[2]には、《Waw-Conversive》という名で古くから知られてきた時制転換現象がある。しかし、その言語学的な理解に関しては、数世紀に渡って活発な議論が展開されてきたにもかかわらず、未だに一致した見解に達していないのが現状である。そこで、この小論では、考察の対象を物語談話に限った上で、最近の談話文法の成果に基づいたWaw-Conversive現象理解のための枠組みを、ひとつの新しい作業仮説として提示してみようと思う。

1．Waw-Conversive現象とは何か？

古典ヘブル語(以下単にヘブル語とする)の動詞には、命令形や不定詞・分詞を別にすると、2種類の形態上の対立がある。ひとつは、動詞の語幹に接尾辞がついて人称変化するqātal形(以下 ＱＴＬとする)で、もうひとつは、接頭辞と接尾辞の組み合わせで人称変化するyiqtōl形(以下 ＹＱＴＬとする)である。例えば、ktb(書く)という動詞の1人称単数は、ＱＴＬでは "kātábtî" であるが、ＹＱＴＬでは "'ektōb" となる(下線部が接辞)。また、同じ動詞の3人称複数は、ＱＴＬでは "kātəbû"で、ＹＱＴＬでは "yiktəbû" である。

現在、ほとんどの文法書では前者をperfect、後者をimperfectと呼んでいるが、これらは概ね日本語の「タ形」と「ル形」に相当するものと考えることができる[3]。

(1) wəlaḥōšek　qārā'(QTL)　lā́ylāh
そして、その闇を　彼が呼んだ　夜
彼はその闇を夜と呼んだ。(創世記 1:5)

(2) wə'ānōkî　'ehyeh(YQTL)　lāhem　lē(')lōhîm
そして、私　私がなる　彼らに　神に
私は彼ら(にとって)の神となる。(エレミヤ書 24:7)

ところが、(1)(2)の例文をそれぞれ直前の文とともに引用すると、

(3) wayyiqrā'(YQTL) 'ĕlōhîm lā'ôr yôm wəlaḥ̮ōšek qārā'(QTL) lāylāh
そして、彼が呼んだ　神　その光を　昼　そして、その闇を　呼んだ　夜
神は、その光を昼と呼び、その闇を夜と呼んだ。（創世記 1:5）

(4) wəhāyû(QTL)－lî　lə'ām　wə'ānōkî　'ehyeh(YQTL)　lāhem　lē(')lōhîm
そして、彼らがなる-私に　民に　そして、私　私がなる　彼らに　神に
彼らは私の民となり、私は彼らの神となる。（エレミヤ書 24:7）

下線部の動詞形が(1)(2)の場合とは反対の時制を表していることが文脈から推定できるのである。さらによく観察してみると、反対の時制を表している動詞形には、(3)の場合にも(4)の場合にも、その直前に接続詞waw*が置かれているということが判明する。これと同様の時制転換現象が旧約聖書の主として散文に組織的に見出だされるのだが、これがいわゆる“Waw-Conversive”(転換のwaw)現象なのである。この現象をとりあえず次のように図式化しておくことにしよう。

(5)　Ｑ Ｔ Ｌ ＝ ｗ＋ＹＱＴＬ　（過　去／完　了）
　　ＹＱＴＬ ＝ ｗ＋Ｑ Ｔ Ｌ　（非過去／未完了）

本稿では、以下、Waw-Conversive現象による時制転換を「転換」と呼び、転換の起こっていない形を「基本形」、転換の起こっている形を「転換形」と呼ぶことにする。また、ＱＴＬの基本形を「qtl」、ＹＱＴＬの基本形を「yqtl」で表し、ＹＱＴＬの転換形を「Wyqtl」、ＱＴＬの転換形を「Wqtl」と表記することにする。そして、「ＱＴＬ」及び「ＹＱＴＬ」は、純粋に動詞の形だけを問題にする場合に限って用いていく。

２．Waw-Conversive現象はどのように理解されてきたのか？

最近、Waw-Conversive現象をめぐる研究史を扱った詳細な研究が出版された。L.McFallの The Enigma of Hebrew Verbal System (Sheffield : The Almond Press, 1982) である。McFallは、この本の中で、1827年から1954年までの間に出されたヘブル語動詞の時制に関する主な学説を詳しく紹介し、それらに対する批判と、今後の研究の方向付けを行っている。研究史を細かく論じることは本稿のめざすところではな

いので、このMcFallの研究に譲ることにして、本節ではMcFallとは別の観点から簡単に研究史を整理しておきたいと思う。

Waw-Conversiveと同様の発想は、既に10世紀初頭のJapheth ha-Leviに見られるという[5]。彼は、(4)のwəhāyûのような場合について、ＱＴＬの前に置かれたwawに過去の意味を未来に変えるはたらきがあると考えて、これを“waw ʻatīdī”(waw of future)と呼んで接続詞のwawと区別した。しかし、最初に時制を転換させるwawを“waw hippuk”(waw conversive)と呼んで、接続詞である“waw hibbur”(waw copulative)と区別したのは、Elijah Levita(1468～1549)や Abraham de Belmes(ca.1450～1549)であると考えられている[6]。

以後17世紀までは研究史に大きな変化は見られないが、18世紀になるとこのWaw-Conversive現象を言語学的に説明付けようとする試みが活発に行なわれるようになる。それ以後最近に至るまでの間に出された様々な学説を、おおまかに次の三種類の立場に分類することができる。

Ａ．基本形と転換形を歴史的に異なる形に帰する立場
Ｂ．基本形と転換形の差異をwawのはたらきによって説明する立場
Ｃ．基本形と転換形の差異を認めない立場

Ａの立場は、J.A.Knudtzon、H.Bauer、G.R.Driverらの比較言語学的アプローチに代表される。また Ｂの立場としては、P.GellのWaw-Inductive説やC.H.Gordonらの複合時制説をあげることができる。Ｃは、N.W.Schroederらの相対テンス説や テンス・アスペクトとは無関係の対立原理を模索したW.Turnerなどに見られる立場である。

Ａ～Ｃの立場は、互いに相容れないような仕方でWaw-Conversive現象の説明付けを目指しているにもかかわらず、興味深いことに、ひとつの前提を共有している。それは、(5)に示したような時制転換現象はあり得ないという発想である。 Ａは基本形と転換形とは本来別物なのだという立場から、Ｂは基本形と転換形そのものに実質的な差異があるのではなく“waw”の機能が差異を生み出しているという立場から、そしてＣは基本形と転換形の区別を必要としない対立原理があるはずだという立場から、いずれも「転換はない」という前提を正当化しようとしているのである。

しかし、この共通の前提に問題はないのだろうか。この素朴な疑問をもって、本稿の出発点としたいと思う。すなわち本稿では、歴史的に同一の起源をもつ(vs.Ａ)基本

形と転換形そのものに(vs.B) 何らかの差異がある(vs.C)のではないかという前提に立った上で、ヘブル語時制を記述するための共時的な枠組みを、基本形と転換形のとる分布上の違いを手掛かりにしながら模索していくことにする。

3．基本形と転換形のとる統語論的分布

基本形と転換形のとる語順に関して、基本形が文頭に立たない【(W)ＸＶ－】のに対し転換形は必ず文頭に立つ【ＷＶ(Ｘ)－】という違いのあることが知られている[7](Wはwaw、Ｘは何らかの要素、Ｖは動詞)が、この節ではＸの位置にどのような要素が現れうるのかを手掛かりにして、これを統語論的分布へと発展させてみたいと思う。

Ｘの位置に現れる要素としては、まず、主語が考えられる。（以下で引用する実例では、動詞の部分に下線を引いて、その肩に付した数字で形を区別することにする：qtl[1]、yqtl[2]、Wqtl[3]、Wyqtl[4]。）

(6) wənînəwēh hāyətāh[1] ʻîr-gədōlāh lē(ʼ)lōhîm
そして、ニネヴェ ～だった 都市-大きい 非常に
ニネヴェは、非常に大きな都市であった。 （ヨナ書 3:3）

(7) wəhûʼ yimlōk[2] taḥtāy
そして彼 王になる 私の代わりに
彼は、私に代わって王となる。 （列王記上 1:35）

また、目的語や前置詞句もＸの位置を占めることができる。

(8) wəʼōtāk yəḥayyû[2]
そしておまえを かれらが生かしておく
かれらはおまえのことを生かしておくだろう。（創世記 12:12）

(9) wəlaḥōšek qārāʼ[1] lāylāh
そして、その闇 かれが呼んだ 夜
彼は、その闇を夜と呼んだ。 （創世記 1:5）

一般に、ヘブル語の自然な語順はＶＳＯであるとされている。そのことをふまえると、(6)～(9)に示されるような(W)ＸＶ－という語順は、「不自然」な語順であると

言えるだろう。池田(1982)は、casus pendensの分析を通じてこの(W)XV-という語順と題目化(Topicalisation)との間に深い関係のあることを明らかにしている。これに基づいて、Xの位置に主語・目的語・前置詞句などが現れる(6)〜(9)のような例をまとめて《題目化の起こっている場合》とすることができる。

Xの位置に現れる要素として次に考えられるのは、接続詞や関係詞である。

(10) ka'ăšer 'ābar[1] 'et-pənû'ēl
〜ときに かれが過ぎた ペヌエルを
彼がペヌエルを通り過ぎたとき、 (創世記 32:32)

(11) 'im-tehĕzaq[2] 'ărām mimmennî
つよい-ならば アラム 私より
もし、アラムが私よりも強ければ、 (サムエル記下 10:11)

(12) (hārā'āh) 'ăšer-dibber[1] la'ăśôt-lāhem
(災 い) Rel かれが言った 行なう かれらに
彼が彼らに下すと言ったところの(わざわい) (ヨナ書 3:10)

(13) (hammāqôm) 'ăšer yiškab[2]-šām
(場所) Rel かれが寝る-そこに
彼がそこに寝るところの(場所) (ルツ記 3:4)

(10)〜(13)の例は、Xの位置に接続詞または関係詞がくることによって、その文全体が他の文の構成要素として埋め込まれている例である。それ故、これらをまとめて《埋込文において》というかたちで条件化することができよう。

さらに、否定辞(Neg)は必ずXの位置に現れる。

(14) wəlō' yākəlāh[1] 'ôd haṣṣəpînô
そしてNeg 彼女ができない もはや かれを隠すこと
彼女は、とうとう彼を隠しきれなくなって、(出エジプト記 2:3)

(15) wəlō'-yihyeh[2] 'ôd hammáyim ləmabbûl ləšaḥēt hā'áreṣ
そしてNeg ある もはや 水 洪水に 滅ぼすこと 地
もはや、洪水が地を滅ぼすようなことはない。(創世記 9:15)

このことから《否定辞のあるとき》には、基本形が用いられると言うことができる。

その他に、いくつかの副詞的な語句がXの位置に現れることがある。例えば、

(16) 'āz hûḥal[1] liqrō' bəšēm YHWH
そのとき 始めた 呼ぶことを 主の名を
そのとき、人々は主の名を呼び始めた。(創世記 4:26)

(17) wəhinnēh 'ālāh[1] qîṭōr hā'āreṣ kəqîṭōr hakkibšān
すると 見よ! のぼった 煙 地の 煙 かまどの
見よ、その地の煙がかまどの煙のように立ちのぼっていた。(創世記 19:28)

(18) 'al-kēn qārā'[1] šēm-hā'îr ṣôʿal
それ故 かれが呼んだ 名-その町の ツォアル
それ故、彼はその町の名をツォアルと呼んだ。(創世記 19:22)

(16)〜(18)の例は、これまでの例のようにうまくまとめることが難しい。しかし、これらに共通した特徴として、文頭に置かれた副詞的なものによって何らかの意味での「強調」が行なわれているということをあげることができる。「強調」ということばを最も広義に用いるという前提で、とりあえず、(17)〜(19)を《強調されている場合》としておくことにする[8]。

次に転換形の分布について考えてみよう。前項でも触れたようにヘブル語はＶＳＯ型の言語である。そのため、転換形のとる ＷＶ(Ｘ)-という語順はきわめて自然な語順だと言うことができる。従って転換形のとる統語論的分布もまた「自然」さによって特徴付けられている。すなわち、題目化も埋め込みも否定も(広義の)強調も施されていない「ふつう」の文というのが転換形の現れる文のタイプなのである。

(19) wəyāšab[3] 'al-kis'î
そして彼がすわる 私の王座の-上に
彼は、我が王座に座すだろう。 (列王記上 1:35)

(20) wayyāqom[4] mélek-hādāš 'al-miṣrāyim
そして 立った 王－新しい エジプトに
エジプトに新しい王が即位した。 (出エジプト記 1:8)

転換形のとるこのような分布は、題目・接続詞・関係詞・否定辞・「強調」の副詞類が必ず文頭に置かれるという語順上の制約によって保証されている。

本節で述べてきたことを要約すると、①有題文 ②埋込文 ③否定文 ④強調文 という4つの文のタイプに関して、

(21) 基本形の分布は、そのいずれか(①∪②∪③∪④)であり、
転換形の分布は、それ以外($\overline{①∪②∪③∪④}$)なのである。

4．Waw-Conversive現象理解のための作業仮説

前節では、基本形と転換形とが各々どのようなタイプの文に現れうるかについて考えてきたが、次にそれを談話文法の視点から解釈し直してみよう。

最近の談話文法の研究成果によって、物語談話にある種の普遍的構造を認め得るということが分かってきた。例えば、P.J.Hopper(1979)は、"It is evidently a universal of narrative discourse that in any extended text an overt distinction is made between the language of the actual story line and the language of supportive material which does not itself narrate the main events."(p.213)と述べ、前者を「前景」(foreground)、後者を「背景」(background)と呼んでいる。彼によると、前景の部分だけが本当の意味で語られているのであって、背景は、語りを補ったり、敷衍したり、説明したりするような、語りそれ自体にとっては付随的で従属的な要素であるという。ここでは、前景を物語談話にとって「不可欠な」骨組み的要素、背景を物語理解のために「必要な」肉付け的要素として概念規定しておく[9]。

さて、Hopperは、「前景」と「背景」を弁別する主要な特徴として、次のような基準を挙げている。

Ⅰ) 連鎖性(sequentiality)
前景は、時間的順序に従って連鎖的に配列される
背景は、前景との同時性を持つだけで、連鎖は形成しない

Ⅱ) 焦点構造(focus structure)
前景では、焦点が述部に置かれる(unmarked distribution of focus)。
背景では、焦点が題目に置かれる(marked distribution of focus)。

Ⅲ) 断定性(assertiveness)
前景には断定性の高い表現が用いられる
背景には断定性の低い表現(irrealis, modal, negation)が多い

これらの特徴と(21)でまとめた基本形／転換形の分布を比較してみると、有題文はⅡの基準によって、否定文はⅢの基準によって「背景」的な性格を持ったものであることが分かる。また、埋込文が付随的・従属的な要素であることは言うまでもない。だが、強調文に関してはどうであろうか。(16)～(18)の各文が用いられている文脈を頼りに考えてみよう。

(16)' アダムはさらに妻を知って、彼女は男の子を産みました。カインがアベルを殺したので、その代わりに神は私にもうひとりの子をくださったと、彼女はその子の名をセツと呼びました。セツにも息子が生まれ、彼はその子をエノシュと名付けました。人々が主の御名を呼び始めたのは、そのころのことです。（創世記 4：25～26）

(17)' 彼がソドムとゴモラおよび低地の全地方を見下ろすと、その地の煙がまるでかまどの煙のように立ち上っています。（創世記 19：28）

(18)' ロトは彼ら(御使い)にこう言いました。「主よ、どうかそんなことになりませんように。（中略$_1$） 御覧ください。あの町なら近くて、逃げて行けます。それに小さい町です。どうか私をあそこに逃がしてください。小さい町ではありませんか。命ばかりはお助けください。」（中略$_2$）それ故、その町の名前はツォアル(小さい)と呼ばれるのです。

（創世記 19：18～22）

(16)'～(18)'から分かることは、(16)(18)の各文が直前の文脈に対する補足・説明を加えるようなはたらきを担っており、(17)の文が視覚情報の埋め込みとして用いられているということである。'āz, hinnēh, 'al-kēn等の副詞類は、「強調」というよりはむしろ「背景」の指標になっているのである。

一方、転換形の方は、しばしば"waw-consecutive"(連続のwaw)と呼ばれることからも分かるように、連鎖性の点では「前景」との強い相関を認めることができる。また、転換形をとる文には題目や否定辞などが現れることがないので、焦点構造や断定性の点でもこれを「前景」とみなすに十分である。

Hopperの「前景」「背景」が本当に普遍性をもったカテゴリーであるかどうかは、なお予断を許さない問題である。とはいえ、本節での考察からして、少なくともヘブル語動詞の基本形と転換形の差異を理解する上では、これらが非常に有効な分析概念

であることは確かである。これに基づいて、《Waw-Conversive現象》理解のための新しい作業仮説として次のような枠組みを設定することができる[10]。

(22)　転換形のはたらき：物語談話の前景を示す
　　基本形のはたらき：物語談話の背景を示す

5．作業仮説の適用例

本節では、(22)の枠組みを２つの短いテキストに適用してみようと思う。テキスト中の◆がついた文は「前景」であり、「背景」の文には◇がつけてある。逐語訳はつけないが、動詞の部分に下線を引いて１～４の番号で形を区別するとともに、動詞の前に置かれた要素にTop(ic)/Conj(unction)/Rel(ative)/Neg(ative)/Adv(erb)の略号を付して文のタイプが分かるようにする。紙面の都合からこれらのテキストの構造に関して細かい言及を行うことはできないが、これによって、転換形の文が物語の前景を構成しており、基本形の文が名詞文(verbless sentence)と共にそれに背景を添えているということがある程度例証されるのではないかと思われる。なお、使用するテキストには例文(1)(2)を含んだものを選んだ。

＜テキストＡ　創世記 1:1～5＞

◇bərē(')šît(Top)　<u>bārā'</u>[1]　'ĕlōhîm　'et-haššāmáyim　wə'et-hā'ā́reṣ（初めに神が天と地を創造した）
◇wəhā'ā́reṣ(Top)　<u>hāyətāh</u>[1]　tōhû wābóhû（地は混沌としていた）
◇wəḥóšek　'al-pənê　təhôm（闇が深淵の上にあった）
◇wərûᵃh　'ĕlōhîm　məraḥépet　'al-pənê　hammā́yim（神の霊が水の表面を漂っていた）
◆<u>wayyō(')mer</u>[4]　'ĕlōhîm（神が言った）
◇<u>yəhî</u>[2]　'ôr（光があるように）
◆<u>wayhî</u>[4]-'ôr（光があった）
◆<u>wayyar(')</u>[4]　'ĕlōhîm 'et-hā'ôr（神がその光を見た）
◇kî-ṭôb（良しと）
◆<u>wayyabdēl</u>[4]　'ĕlōhîm bên hā'ôr ûbên haḥóšek（神が光と闇とを分けた）

◆wayyiqrā'⁴ 'ĕlōhîm lā'ôr yôm（神が光を昼と呼んだ）
◇wəlaḥōšek(Top) qārā'¹ lā́ylāh（彼が闇を夜と呼んだ）
◆wayhî⁴-'éreb（昼があった）
◆wayhî⁴-bóqer（夜があった）
◇yôm 'eḥād（第１日）

初めに神が天と地を創造されました。地は混沌としていて、闇が深淵の上にあり、神の霊が水の表面を漂っています。神は、「光よ、あれ！」と仰せになりました。すると、光がありました。神はその光をよしとご覧になりました。神は、光と闇とを分けて、光を昼と呼びました。闇の方は、夜と呼んだのです。

＜テキストＢ　エレミヤ書 24：5～7＞

◇kōh(Adv)-'āmar¹ YHWH 'ĕlōhê yiśrā'ēl（イスラエルの神、主がこう言った）
◇kattə'ēnîm haṭṭōbôt hā'ḗlleh kēn(Adv)-'akkîr² 'et-gālût yəhûdāh ※ ləṭôbāh
（これらの良いいちじくのように私がユダの捕囚民を良いものにする）
◇'ăšer(Rel⇨※) šillaḥtî¹ min-hammāqôm hazzeh 'éreṣ kaśdîm
（私がこの場所からカルデヤの地に送ったところの）
◆wəśamtî³ 'ênî 'ălêhem ləṭôbāh（私が彼等に目をかけて良くする）
◆wahăšībōtîm³ 'al-hā'āreṣ hazzō(')t（私が彼等をこの地に帰す）
◆ûbənîtîm³ （私が彼等を建てる）
◇wəlō'(Neg) 'ehĕrōs²（私が倒さない）
◆ûnəṭa'tîm³（私が彼等を植える）
◇wəlō'(Neg) 'ettôš²：（私が引き抜かない）
◆wənātattî³ lāhem lēb lādá'at 'ōtî（私が彼等に私を知る心を与える）
◇kî 'ănî YHWH（私が主であると）
◆wəhayû³-lî lə'ām（彼等が私にとって民となる）
◇wə'ānōkî(Top) 'ehyeh² lāhem lē(')lōhîm（私が彼等にとって神となる）
◇kî(Conj)-yāšúbû² 'ēlay bəkol-libbām（彼等が心を尽くして私に立ち返るからだ）

「イスラエルの神、主はこう仰せになった。これらの良いいちじくのように、私は、この場所からカルデヤ人の地に送ったところのユダの捕囚民を良いものにしようと思う。私はかれらに目をかけて良くし、この地に帰らせ、かれらを倒すことはしないで建て、引き抜くことはしないでかれらを植え、かれらに私が主であることを知る心を与える。かれらは、私の民となる。そして、私はかれらの神となろう。かれらが心を尽くして私に立ち返るからだ。」

6．今後の課題

もし(22)で提示した作業仮説が正しいものだとすれば、古典ヘブル語のWaw-Conversive現象は、前景／背景という物語談話に広く認められる構造を具現するための術として理解するのが適当であるということになるだろう。さらに、物語談話では(5)に示したようなＱＴＬ／ＹＱＴＬの対立よりも(22)に見られるような基本形／転換形の対立の方が優先されているということにもなるのかもしれない。しかしながら、古典ヘブル語が死語であるために、(22)は永遠に作業仮説の域を出ないという宿命の下にある。ただし、この事実は帰納的な説明原理としての言語理論の性質に反するものではないし、文献学的な作業を積み上げていくことによってその妥当性を相対的に高めていくことはできるはずである。

その際、無視することのできない(22)の問題点をいくつか記しておくことにする。まず、この枠組みではWyqtlとWqtlとを区別せずに「転換形」として一括しているが、物語談話の性質上Wqtlの用例は非常に限られており、果たして同一のレベルで取り扱って良いものかどうか検討の余地が残る。次に、転換形のとるＷＶ(Ｘ)－という語順には例外がないのだが、基本形の(Ｗ)ＸＶ－という語順には例外がないわけではない。まれに基本形が文頭に立つことがある。この文頭に立つ基本形のはたらきについて、別の機会に論じなければなるまい。最後に、ヘブル語の時制転換の仕方の特異性の問題がある。通常の時制転換現象の場合、意味のうえでunmarkedな基本形の方が使用頻度も高く前景に現れるのに対して、Waw-Conversive現象の場合には、奇妙なことに、意味的にはmarkedなはずの転換形の方が前景部に分布し使用頻度においても勝っている。このような特異な転換の仕方が定着するに至った過程について、何らかの通時的な説明がなされる必要があると思われる[11]。

【注】

1）本稿は、昭和60年度に筑波大学大学院文芸・言語研究科に提出した博士課程中間論文の一部に加筆修正を施したものである。本稿の掲載にあたって審査の労をとってくださった松本克己教授と実質的な論文指導にあたってくださった津村俊夫助教授に改めて感謝したい。

2）古典ヘブル語は、紀元前２千年紀から１千年紀にかけてイスラエル民族によって用いられた言語でセム語族に属する。その主たる言語資料は『旧約聖書』である。

3）英語に訳す際にＱＴＬが過去形・完了形で、ＹＱＴＬが現在形・未来形あるいは法助動詞等をともなって訳される場合が多いことからも分かるように、ＱＴＬ／ＹＱＴＬの対立はテンス・アスペクト・ムードのいずれかひとつで割り切れるものではなく、これらが複雑に絡み合った総体としてとらえざるを得ない。そこで、本稿では「時制」という用語をテンス・アスペクト・ムード等を包摂した概念として用いることにする。

4）wawとは、[w]という音価を持つヘブル語のアルファベット文字の名称である。同時に、このwaw文字によって"and"と訳される接続詞(wə/û等の異形態を持つ)を総称させている。また、通常のwawが wə/û であるのに対して、このwayyiqrā'についたwawが wa＋語頭子音の重音という特徴的な形態を持っていることに注意を要する。これは、ＹＱＴＬにつくwaw-conversiveだけに認められる形である。

5）McFall(1982)、pp.3～4。

6）McFall(1982), pp.8～9。

7）例えば、J.Blau(1976), p.46には次のような記述がある。"I.e., very broadly speaking, past is expressed, when occurring in a syntactic environment that does not admit waw copulative, by qtl, otherwise by wayyqtl, whereas present/future are marked by yqtl when not preceeded by waw copulative, otherwise by wəqtl."

8）ここで立てた４つの基準は排他的なものではない。いくつかの基準が同時に実現されることもあるが、４つの基準のうちの少なくともひとつが実現されることによって転換形の現れる可能性の排除されることが重要なのである。

9）H.Weinrich(1964)が"Vordergrund/Hintergrund"という用語によって、またJ.E.Grimes(1975)が"event/non-event"という用語によって、Hopperの"foreground/background"と非常に似通った区別を立てていることは注目に値する。

10）この枠組みは、R.E.LongacreやF.I.Andersenの次のような発言によって部分的に支持されるものと思われる。"In Biblical Hebrew VSO clauses (with a peculiar narrative tense) mark the event line while SVO clauses (not with the special narrative tense) are reserved for the supportive material."(Longacre, 1983, p.17) "The workhorse of Hebrew narrative is the waw-CONSECUTIVE WP(=Wyqtl) clause." "The clauses used in the main stream begin with V(=verb)." "A circumstancial clause is structurally marginal to a paragraph."(Andersen, 1974, pp.77～78)

11）この問題に関しては、Weinrich(1964)の第Ｘ章の６に報告されている南独方言の例に示唆に富むものがある。

【引用文献】

Andersen, F.I.(1974),

The Sentence in Biblical Hebrew, The Hague : Mouton Publishers.

Blau,J.(1976)

A Grammar of Biblical Hebrew, Wiesbaden : Otto Harrassowitz.

Grimes, J.E.(1975),

The Thread of Discourse [Janua Linguarum : Series Minor, 207], The Hague : Mouton Publishers.

Hopper, P.J.(1979),

"Aspect and Foregrounding in Discourse," in T.Givón(ed.), Discourse and Syntax [Syntax and Semantics 12], New York : Accademic Press, 213-241.

池田　潤(1982),

「聖書ヘブル語に於ける『二重主語』構文について———casus pendens の言語学的分析」学士論文, 筑波大学.

————(1985)

「古典ヘブル語物語談話における時制転換について」博士課程中間論文, 筑波大学.

Longacre, R.E.(1983),

The Grammar of Discourse, New York : Plenum Press.

McFall, L.(1982),

The Enigma of the Hebrew Verbal System, Sheffield:The Almond Press.

Weinrich, H.(1964)

Tempus. Besprochene und erzaehlte Welt, Stuttgart, Berlin, Koeln, Mainz : Verlag W.Kohlhammer.（本稿での言及は、1977[3]からの日本語訳：ハラルト・ヴァインリヒ著、 脇阪 豊・大瀧 敏夫・竹島 俊之・原野 昇 共訳 『時制論』 紀伊國屋書店 に拠る。）

A Working Hypothesis for the Understanding of the "Waw-Conversive" Phenomenon

Jun IKEDA

The problematic tense-switching phenomenon called "waw-conversive" is often said to be the greatest obstacle to the understanding of the classical Hebrew verbal system. The purpose of this paper is to provide, as a new working hypothesis, a discourse-level category for the interpretation of the phenomenon.

It is observed that the basic form (BF) is usually preceded by the topic, subordinate conjunction, relative particle, negative particle or adverb, while the converted form (CF) occupies the initial position in a sentence. This means that in a sentence of marked type, such as a sentence with topicalization, an embedded sentence, a negative sentence or an "emphatic" sentence, the BF is used; otherwise (i.e. in a sentence of unmarked type) the CF is used.

Comparing the syntactic distributions of the BF and CF with P. J. Hopper's BACKGROUND/FOREGROUND distinction, we can not but recognize close relation between them. This enables us to propose the following framework:

function of the BF : <u>BACKGROUNDING</u>

function of the CF : <u>FOREGROUNDING</u>